

## 作業の知識を活かすこと、生み出すこと～1 人の作業療法士の経験から～

村井真由美

公益財団法人 慈愛会 介護老人保健施設 愛と結の街

### 作業科学に出会うまで

作業療法士 (OTR) の養成校に入学する前に、作業療法 (OT) とはクライアントと OTR が生き生きと作業を共にしている絵図を私は思い浮かべていた。クライアントが楽しみながら病気や障害から回復していくのだろうと夢を描いていた。入学してから、臨床実習に出てから現実とは随分違うのだと実感するようになった。特に臨床実習では各現場で求められることが異なり、たくさん勉強しなければならないことはわかった。今から約 20 年前の話だが、身体障害領域では上肢機能、認知・高次脳機能、日常生活活動 (ADL)、趣味 (手工芸など)、レクリエーション、職業前評価と訓練 (職業適性検査) など、精神障害領域は対人関係の向上や生活のリズム作り、精神症状の悪化の予防など、発達障害は正常発達、感覚統合、遊びなどがキーワードで、私が今携わっている老年期障害に関しては始まったばかりで OTR 達も手探りという状況だった。一体、OT の共通項は何なのだろう、と私の頭の中は混乱していた。「作業」というキーワードでまとめることができたなら随分救われたのかもしれないが、あの頃は求められることを必死でするしかないが、分野が変わると今までの知識や経験があまり役に立たないかも知れないという恐怖心があったことを覚えている。

最初に就職したのは身体障害者リハビリテーションセンターだった。私はアイデンティティクライシスどころか OTR としてのアイデンティティさえもわからなかった。先輩達がしていることの真似やクライアントの希望にそのまま応じているだけだった。OTR として何かが違うと思いつながら周囲にモデルも打開策もなかった。OT の説明ができず、「手のリハビリです」、「理学療法士が基本動作なので OTR は応用動作です」などと必死で答えていた。いつも心の中は苦渋に満ちていた。カンファレンスで理学療法士が体幹・下肢機能に加えて上肢機能を、言語聴覚士が認知・高次脳機能障害を、看護師が ADL について説明した後、自分は何を話せばいいのか途方に暮れることもあった。今となっては感謝しているが、同僚の理学療法士の言葉が胸

に刺さった。OTR が少ない時代にハンドセラピーを担当していた理学療法士が「俺、あんた達のしていることできるよ。OTR がやめても代わりできるから。痛くも痒くもないよ。」と言った。私が自分と同じ年の頭部外傷後四肢麻痺の男性を担当した時に関節可動域訓練やストレッチをしていた私に対し、一緒に担当していた理学療法士が「この子の生き甲斐は？仕事は？あんたと同じ年なんだよ。俺たちと同じことをしてどうするの？」と私に言った。私は心の中で、「こんな重度の障害を持っている人に生き甲斐や就労なんて無理。就労はソーシャルワーカーの仕事で私には関係ない。何で私ばかりに言うの？本人もお母さんも少しでも元の体に、って言っているのに。」と思いつながら何も答えられず、泣くしかなかった。同僚 OTR 達は「大変だったね。いつも言うこときついでね」と慰めてくれた。今では同僚の理学療法士達に感謝している。これらの言葉の意味や重みがとても身にしみる。もし、私の関節可動域訓練やストレッチが上手だと言われていたら今の私はいないかも知れないと思う。

私は悩みながらも OT らしいことをしようとして OT プログラムの中に作業を取り入れようとした。よく使ったのは折り紙やちぎり絵だった。「指先の力がつきますよ」、「おうちでも訓練を兼ねてできますよ」と説明した。中には本当に趣味となり、手指の機能がよくなり、作業の素晴らしさを実感させられたクライアントがいたが、たいていは OT 室のみの限られた時間の作業だった。「ちぎり絵をするとイライラして気が狂いそうだからやめていいですか」とクライアントに言われたことがあった。前述の理学療法士達や他職種、クライアントに「その作業をして何になるの」、「その作業をしたら何かできるようになるの？」と聞かれることがあったが、「手指機能が良くなると思います」、「楽しみになります」、「高次脳機能障害が良くなると思います」と答え、「具体的には?」、「楽しくないって言うていたけど」、「OT 以外の時間はしてないって」と言われたら黙るしかなかった。

結局、その職場は 2 年で退職し、自信を持って OT

を語り、実践できるようになりたい一心で20代を進学や教育現場で働き、お金と時間を費やすことになった。

### 札幌医科大学大学院で作業科学を学ぶ

1995年に縁あって、「作業科学—作業的存在としての人間の研究」<sup>1)</sup>の第34章の翻訳に関わる機会があり、1998年に札幌医科大学で行われた第2回作業科学セミナーに参加した。このセミナーでWell elderly study<sup>2,3)</sup>の存在を知り、ただ何か作業をすればいいというものではないのだ、と衝撃を受けた。紆余曲折を経て2000年春に札幌医科大学大学院に進学した。当時の授業は作業科学の教科書<sup>1)</sup>を読んでディスカッションするものであった。教科書<sup>1)</sup>には、「チンパンジーと母親と子どもの作業」という章があり、知人が学位論文作成のために動物実験をしていたことを思い出し、学位を得るには動物実験は避けられないのかと思った。「ホームレスの日常生活における時間、空間、および地理学」、「学者としての仕事」、「作業としての配偶者選択」、「針手芸と作業」では作業を心理学、社会学、歴史学などと多角的に捉えており、おもしろいと思ったがそのようなクライアントを担当しない限り役に立たない知識だろうし、何でも“作業”になってしまうのではないのかと思った。“作業”について学ぶことは楽しいがOT実践には役に立たないかも知れないと思った。今となっては無礼な考えだったと自覚しているが、大学院の3年間を人生最大の趣味の時間とし、運良く修了できたら普通のOTRとして働こうと人知れず決意していた。

学位を取るには論文を書かなければならない。作業科学は実践にあまり役に立たないかも知れないと思いながら、自分が訳した34章<sup>1)</sup>は初めて自分にこんなOTがしたい、と思わせてくれたものもあったので、自己の実践の中から浮かんだ疑問を研究テーマに選んだ。それは「人が選ぶ作業は過去に選んできた作業と関係があるのではないか」である。大学院進学前の数年、高齢者領域で働く機会があった。クライアントに対し、全員同じように対応することに疑問があり、集団の中で作業に参加しないクライアントに何ができるのかと苦悶していた。過去の作業との連続体としての現在、未来の作業に援助できる方法はないかと思い、研究に着手した。それは前述の第34章<sup>1)</sup>の「人間は作業を通して自己を形成する」や「生存者(survivor)は(中略)その人は過去の生活と、作業的存在としての感覚を取り返すことを切に願っているのである」という文章に背中を押されたのである。

### 作業科学を学び実践が変わった

作業科学を学び、研究をした結果私のOTは変わった。一つ目は「作業の専門家」と名乗れるようになった。“OTは分野によってやるのが全然違いますよね”という言葉に対し、「身体、精神、発達、老年期のどの領域でも作業遂行上の問題があれば作業をすることが難しくなります。OTRはそれぞれの領域でクライアントの作業ができるようになることを支援しています。いかなる障害に対しても作業ができるように支援するのがOTRです」と言えるようになった。あるクライアントが「あなたはあちこちでいろんなことをしていて食事のところにいる、お習字したり、手芸したり、畑仕事もしているじゃないか。何の仕事なのさ」と私に言った。私は「食事も習字も手芸も畑仕事も“作業”と呼ばれ、“作業”ができるようにお手伝いする仕事です。人によってしたい作業が違うのです」と答えた。こう答えた後に“作業科学に出会うまで”で述べたような苦し紛れのOTの説明ではなく、やっとOTの説明ができるようになったと思えた。二つ目に作業をすることでクライアントの近い将来がどのような状況になるか予測、説明することができるようになった。疾患や障害の予後予測ではない。例えばある作業がどの程度の援助でどの程度の頻度で行うことになるであろうというようなことである。三つ目は作業を基盤とした実践だけになった。マット上での徒手的な介入や平行棒での歩行練習など行わなくなった。四つ目にクライアントが作業をする上で心身機能の問題が作業遂行に影響し、そのような問題に関する知識を持っているOTRが作業の可能化を支援するのだ、と改めて認識した。そのために医学的な知識が大切であると思った。それ以外に人の意志、価値、習慣、環境、作業等の知識<sup>4,5)</sup>も必要であることがわかった。作業についてじっくり学ぶ前はクライアントの心身機能の問題をなるべく解決したらいかなる環境でもやっていると置いていた。言い換えると心身機能の改善がなければ一生作業ができない状況も起こりうる、ということである。動作の連続体として作業ができて認知的な問題がある、クライアントの動機付けや習慣に則していなければ作業ができるようになることが難しいということを知った。

### 実践に役だった作業の知識の例

「作業科学」の教科書<sup>1)</sup>の話題に戻る。第1章の「折り込まれた活動と作業の概念」の中に“図1-1 母親は一つの作業と別の作業を折り込んでいる。この写真で

は、料理をする一方で注意深く目を娘に向けている”という写真があった。大学院入学と機を同じくして AMPS (Assessment of Motor and Process Skills : 運動とプロセス技能の評価)<sup>6)</sup>講習会の講師養成のトレーニングを受けていた。AMPS 課題の中にはトーストを焼いて、卵料理を作って、飲み物を準備するというものがある。作業は一度に一つだけ行われるだけではなく、複数の活動を同時進行で行い、「朝食の準備」という一つの作業が成り立つということがわかった。このことを図 1-1 の写真から学んだ。今までクライアントが自宅に帰ったときに OT で調理ができたのに自宅で朝食を作れず、在宅生活の継続が困難という理由で再入所したことに対し、クライアントのやる気のなさだと思っていた。入所中 OT では単品を時間帯も、実施時間も考えず作ることをだけをしていた。何がクライアントにとっての朝食だったのか、朝食作りの前後の作業には何があり、お互いがどう関係していたかを考えることがなかったのである。岡ら<sup>7)</sup>は、自分らしい生活に繋がる作業の要因として「自分らしい作業の行い方」や自分らしい作業がどのようなものかについての本人の考え方を表す「作業観」というカテゴリーを挙げている。OTR は作業遂行に関する知識があるので、この疾患や障害ならこのやり方で、この程度できればよい、ということを考え、提示し、クライアントと練習を行う。しかし、クライアント独自の作業のやり方や作業観の重要性を無視すると現実と自分らしさが乖離し、クライアントは作業を続けることをやめてしまうのかも知れない。OTR は自身の知識とクライアント独自の作業のやり方や作業観とをすりあわせ、協働できたときに最も専門家として最適の支援ができたと言えるのではないかと考える。

自分らしさという点では、第 34 章「作業的ストーリーテリングと作業的ストーリーメイキングのためのテクニックとしてのグランディッドセオリー」<sup>1)</sup>で Richardson 博士の洋服や杖の選択についての話題がでてきた。この章を読むまではそれぞれの障害にあった服や杖があり、そのことをよく知っているのは OTR で、クライアントにその中から選んでもらうことが普通だと思っていた。障害をもってもお自分らしい洋服や杖を選ぶ過程にクライアントが参加するということは当時の私には驚くべきことであり、これぞ OT だと嬉しく思ったものである。

第 17 章「霊長類における環境の豊かさ—作業科学との関連」<sup>1)</sup>では、捕獲され、檻の中にいるサルがむき出しの床の上で暮らし、自動給餌器で食物を与えられ

る状況では、1 日を食物探索に用いる時間は 2% で、30% 以上を攻撃的に費やし、床におがくずを敷くなど食物の処理を難しくする環境にすると探索活動の時間が増え、攻撃性は減少した、と述べられている。サルと人間は一見遠そうに見えるが、することがないつらさを経験することが実践現場では多々ある。ある怒りっぽいクライアントがいた。OT はインタビューし、したい作業、できるようにになりたい作業がないか尋ねたが、作業をする気分になれない、でいつも話が終わった。OTR は本人の好きなプロ野球の話や新聞等の資料を用いて積極的に行い、作業の糸口を探した。その時間のクライアントは楽しそうにしているが、しばらくすると「作業療法って予定に書いてあるけど 1 回も来ることがない。何もしてもらったことがない」と立腹した。OT 評価と介入の過程を説明すると「そんなことを言った覚えはない」とクライアントは答えた。失語症や知的低下があるクライアントなので半分仕方ないとは思っていた。ある日、このクライアントに呼ばれた。いつものように私が経緯を説明し、クライアントが立腹しながらそんなことは言っていない、というのがオチだと思っていた。その日のクライアントは泣きながら「何もすることがない。つらいんだよ」と言った。話をよく聞くと発症前は本や雑誌を読むことが好きで、手帳に日々の出来事や健康状態を細かく記録する習慣があった。発症後は活字が理解できず、写真しかわからない。手帳に記録したくても字が書けないということだった。私はクライアントが読み書きという行為を含む知的活動がしたいのではないかと推測した。同僚の言語聴覚士 (以下、ST) に相談したところ、読み書きの言語機能はかなり障害されており、字の模写も困難だろうとのことだった。注意障害のため、同じ問題を長時間することは難しく、短時間でいろいろな課題をした方がよいとのことであった。苦心の末、見つけたのは計算、線つなぎ (数字が打たれた点をつなぐと絵ができる)、左右の絵の間違い探し、あるマークの部分の色塗りすると絵が浮き出るといった脳トレーニングドリルであった。ST によると計算は一桁の繰り上がり、繰り下がりなしのものであれば可能とのことだった。難しい問題になると混乱することがあるので避けた方がよいとのことだった。実際に 1 桁の計算問題を提示した時には「バカにしやがって」と立腹された。大学の有名な先生が簡単な計算を繰り返すことが脳の血流に良いと言っています、私はあなたにとって一番良いものを準備しました、と私はクライアントに説明した。クライアントは渋々応じたが結果的に楽し



そうにしていた。宿題と称して渡した計算以外の課題を居室や廊下で行っている姿をよく見るようになった。間違い探しについては「俺、こんなの好きだったんだよ。新聞の、よくやってた」と話してくれた。STも協力して言語に関する宿題を出してくれたので日中することができ、そのクライアントは立腹することが少なくなった。このクライアントと出会って、第17章<sup>1)</sup>のことを思い出した。

第32章「老年期に意味ある存在を生きる」<sup>1)</sup>ではヘルスケアの支援者(HCA)という団体に所属している高齢者に人生の物語、人生で用いているストラテジー、価値・目標等及び年をとることについての意味について話を聞くという研究の紹介がある。老年期領域で働く私にとってこの章は全て関心があるのだが、特に7つの「適応ストラテジー」が挙がり、その中で“リスクと挑戦”というストラテジーに関しては興味深かった。OTRとして働いているとクライアントへの介入に対し、「失敗したらどうするのですか」、「失敗させないように」ということをよく聞く。ただでさえ、障害や老化現象などによってつらい思いをしているクライアントへの配慮かも知れないが、作業の中でリスクを冒し、挑戦する機会をクライアントから奪って良いのかという疑問を私は持っている。明らかに生命の危険がある、あるいは他者への影響が大きいなどのリスクは避ける必要があると思う。私の人生は失敗が多い。だからこそ成長しているのだと思う。もし私の障害を負った後の人生が成功体験ばかりだと気味が悪いだろうなと思う。2009年に開催された第13回作業科学セミナーのワークショップで話題提供して下さった畑間英一さん、葉山靖明さんは大変活動的でリスクの高い作業を行っていた。二人とも「リスクは好きです」と答えたのが印象的だった。作業科学を学ぶことにより、作業とリスクの関係、リスクのある作業を行う人ということを考えるようになった。

2003年に私にとって待望の本が出版された。PierceのOccupation by Design<sup>8)</sup>である。初めて参加した第2回作業科学セミナーでPierceの研究の紹介が行われた。セミナーの中で参加者はセミナー参加前日の作業を時系列で書き、その作業の意味—楽しみ(Pleasure)、生産性(Productive)、休息(Restoration)がどの程度が一つの作業について10段階でどの程度かを記入した。同時に時間、空間、社会文化的にどのような作業であったかを記入した。私はセミナーが北海道で行われたので蟹好きの家族のために「蟹を買って送る」という作業を行った。「蟹を買って送る」という作業はよりよい

蟹を選ぼうという楽しみがあり、様々な店を見て回り、値段や蟹の種類、大きさを比較することで生産性を感じた。買い物をした後は癒されるような気持ちになった。作業の形態としては私が1人で蟹を買うというものであるが、その先には家族がいた。家族が喜ぶだろうという楽しみがあった。蟹を送った後に家族にいつ頃届く、と電話をするという作業を行った。単に「蟹を買って送る」という作業には3つの作業の意味がブレンドされており、時間、空間、社会文化的な要素があることに気がついた。Occupation by Designは作業の研究の集大成から作られたものであると考えるが、作業の意味については「作業の主観的側面」とし、Pierceはアピール(魅力)と呼んでいる。空間、時間、社会文化に関しては「作業の文脈的側面」とし、インタクトネス(自然な状況)と呼ばれている。PieceはOTR側の要因として「作業デザイン過程の要素」として、セラピストのデザイン技能、協働的作業目標の生成、目標に対する介入の正確な適合、という“的確さ”を挙げている。簡単に言えば、作業が人にとって魅力あるもので、自然な状況で、セラピストが的確にその作業をクライアントと共にに行った場合に治療的力を発揮するというのではないかと考える。Pieceの仕事は作業の知識をOTに生かす一つの取り組みだと私は思う。

Occupation by Designを痛感した例<sup>9)</sup>を紹介する。80代の女性で脳血管障害後軽度右麻痺を有するクライアントの自宅復帰に関わった。独居であり、宅配弁当、ヘルパーの家事援助を受けながら生活するが、毎朝の食事と弁当、ヘルパーが入らないときの食事の準備が必要のために調理練習をOTで行った。評価でAMPS<sup>6)</sup>を行い、作業遂行分析に基づいて練習を行った。3ヶ月の介入後の再評価では作業遂行能力の変化が見られなかった。自宅へ帰られた後、私の職場の通所リハビリテーション(以下、通所リハ)に通って来られていたので4ヶ月ごとにAMPSを実施し、作業遂行能力の追跡調査を行った。評価するごとにプロセス技能が有意に向上していた。老健では週2回、午後2時から練習していた。自宅での食事の準備中は空腹であり、特に朝食は日によって通所リハの送迎までにすませなければならない。作業をする頻度が増えたことと空腹や食事後の作業との兼ね合いという自然な状況が作業遂行能力を向上させたのではないかと考える。老健で練習する時間は満腹であり、急ぐ必要はなく、夕食は確保されている。専門職として評価結果を元に介入したが、この作業の文脈的側面を理解していればもっと良い介入ができたのではないかと考え、その後調理を練

習するクライアントに対しては、空腹になる午前 11 時くらいから始め、昼食時間になったら帰棟しなければならないという設定でできるだけ自然な状況で練習を行うようにした。調理以外の作業に関しても制限はあるが、できるだけ文脈的側面を配慮し、自然な状況でできるように検討、実施している。作業の主観的側面に関しては、入所当初のクライアントは緊張しており、どちらかというとも休息の意味を持つような作業をしたいということが多い。徐々に環境に慣れてくると楽しみ、生産性の高い作業へと移行していく。人が置かれた立場で一番したい作業に魅力があり、魅力のある作業は最も治療的力を発揮すると実感している。OTR はタイミング良く魅力ある作業参加への橋渡しをしなければならず、そのためには的確な作業デザインが必要なであろう。Occupation by Design の絵は私にとってバイブルであり、いつも頭の中に描いている。

### 作業の知識を産み出す

「札幌医科大学大学院で作業科学を学ぶ」でも述べたが博士論文作成のために研究に着手した。研究のきっかけは私が通所リハで非常勤をすることがあり、職員から通所リハのプログラムに参加しない利用者の相談をよく受けたことであった。指導教官の Zemke 教授に「何もしない利用者さんにはどんな作業を提供したらいいのか研究したいです」と話すと、「なぜ作業をしないことがいけないの？何もしない人には理由があるんじゃないの？何もしないようでは何かしているのでは？したくもない作業を提案されるのはその人にとってどうなのかしら？」と返ってきた。作業科学者から“なぜ作業をしないことがいけないの？”と言われたことが衝撃だった。作業について自分がよくわかっていないことに気がついた。「通所リハを利用している高齢者が生涯を通じて参加してきた作業と作業を選ぶパターンについて調べる。関係性を探る」という目的で 4 名の通所リハにいられている高齢者にインタビューを行った<sup>10)</sup>。インタビュー結果を作業の形態、機能、意味の側面から時系列的に分析した。4 名のインフォーマントそれぞれの作業には作業テーマ 7) があり、作業の形態は時系列によって変わり、作業テーマはそれぞれ機能や意味を表していた。「人が選ぶ作業には過去に選んできた作業と関係があるのではないか」という疑問については 3 つの関係性がわかった。一つは、「生涯を通じて作業の形態、機能、意味が同じ」である。過去に経験し、好きな作業を現在も選択している場合もあり、過去に嫌い、苦手と感じている作業は現

在も選ばないということがわかった。二つ目は、「作業の形態は変化しても機能、意味は類似している」である。早川氏（仮名）は通所リハで様々な活動に参加していた。若い頃から多趣味なのだろうと予想していたが、反して仕事一筋で趣味はなく、現在参加している活動は通所リハを利用してから始めたということである。早川氏の仕事の話进行分析すると働きながら夜学に通い、短期大学卒の資格を得た、など継続して学習、挑戦していたことがわかった。早川氏は通所リハで川柳を行っており、同人誌に投稿し、時々入選していた。それぞれの作業の形態は異なるが、挑戦することや知的な活動という作業テーマとして繋がっていることが推察された。三つ目は、「作業の形態は同じでも機能、意味は異なる」である。山田氏（仮名）は通所リハで民謡を踊る活動に参加していた。過去の作業として婦人会で踊りを習っており、地域のイベントで踊っていたという話をしてくれた。それはとても楽しみだったとのことである。当時未熟なインタビュアーの私は「だから踊りを今もやっているんですね」とコメントした。山田氏は「違うよ。私がデイで踊っているのは楽しみなんかじゃない。リハビリなんだよ。ああ、まだこんな風に今日も手が動くな、とかまだまだこういうのはできないな、とか考えながら手足を動かすのさ」と答えた。作業の意味を誤解されることは作業をする本人にとって不快であることは私も経験する。作業の形態だけを見て第三者が判断することがあるが、作業科学者として作業の意味を慎重に捉える重要性を認識させられた。これらの研究結果から、人はライフサイクル、心身機能、環境等の変化がありながらも作業を継続、再開する場合と変化に伴って作業の変更をしていくことがわかった。作業の形態、機能、意味の点から連続性の多様性があることがわかった。自分の研究結果は手前味噌であるが私の実践に役立っており、作業に関して単に昔していたからまたしてみましようではなく、継続・再開することの意味、新しい作業を始めるにあたって込められる作業テーマなど考えて面接、提案、実施をしている。

私の「人が選ぶ作業は過去に選んできた作業と関係があるのではないか」という研究疑問に関連する様々な概念があると考えられる。Clark と Richardson の Occupational-story telling と Occupational-story making（作業的ストーリーテリングと作業的ストーリーメイキング）<sup>1)</sup>、Occupational identity（作業的アイデンティティ）<sup>5,11-18)</sup>、Occupational transition（作業移行）<sup>15,19-21)</sup>、Occupational development（作業発達）<sup>19,22-24)</sup>、Occupation

と continuity (作業と連続性)<sup>25)</sup>という概念と関係がありそうだ。学習し、探せばもっとたくさん関連づけられる概念や研究例と出会えるだろう。これらの知識を身につけることで作業を語る言葉が増え、OTRであれば実践に反映できると考える。

作業の知識を得るには、まずは文献を読むことに尽きると思う。先に挙げた「作業科学」や吉川の「作業って何だろう」<sup>26)</sup>、年刊誌である「Journal of Occupational Science」や日本作業科学研究会が出版している機関誌「作業科学研究」がある。日本作業科学研究会が Journal of Occupational Science の要旨の和訳作業を行っている。ぜひ参照いただきたい。正直、よくわからないこともあるだろう。私が当初感じていた「OT 実践とは関係ない」という思いが生じるかも知れない。17巻2号(2010)の「アイデンティティの作業遂行と場：移住過程における作業とアイデンティティと場の交点の概念化」<sup>18)</sup>という論文について、移住については私たちのクライアントに直接関係ないかも知れない。しかし、新しい環境に移ったという点では類似しているかも知れない。新しい環境に移った人の作業遂行やアイデンティティにはどのような特徴があるのか知ること入院、入所を経て新しい環境に移ってきたクライアントの介入に役立つかも知れない、という視点で読むと楽しめると思う。

### どのような作業の知識が必要か

作業というものを捉えることは複雑ゆえに作業の知識に関してはまだ手つかずの部分が多く残されていると思う。人の作業に関わる OTR としてどのような作業の知識があれば更に OT 実践や他に役立つのだろうか。

たとえば初回評価の際に「(したい、できるようになりたい作業は)ありません」、「作業の前に手が動くように、歩けるようになりたい」とクライアントに言われることはないだろうか。カナダ作業遂行測定(COPM)<sup>27)</sup>などを用いて面接した際に、全員が最初から作業への関心を表明するわけではないことを経験している OTR は多いと思う。私もその1人であり、他のリハビリテーション専門職に比べて肩身が狭いと思っていた。しかし、梅崎の論文<sup>28)</sup>を読み、OBP(作業に焦点を当てた実践)の条件と障壁の一員として「クライアントの状況」というカテゴリーを挙げている。研究参加者の H 氏の語りの中の「(略)必要なタイミングで出せば十分存在価値があるっていうか。(略)何で作業に焦点が当たらないかっていうのは、弱っているときにその人にあるからだと思う。」という

下りに触れ、作業を行うタイミングというものが存在するのではないかと思った。現在の医療、介護保険下で OT を診療報酬の対象として開始する場合は発症の時期や入院(所)が起点となっている。この起点の段階ではクライアントによっては作業を行うタイミングではないため、あるいは弱っている状況のために作業に関する希望が出ないのかも知れない。OT が人気のないリハビリテーション職種であるからクライアントが OT の希望を出さないのではなく、タイミングの問題であるかも知れないと思うようになった。私たちが一度は学習した Maslow の自己実現理論<sup>29)</sup>では生理的欲求、安全の欲求の上に所属や愛、承認、自己実現の欲求が存在する。病気や不慮の事故などのセーフティネットは安全の欲求の要因に関する言われている。作業を行う、始めるタイミングの研究が蓄積されたら OT の保険請求が発症や入所日を起算とするのではなく、本人が作業を行いたいと表明した時からになるかも知れないという多少乱暴な期待を持っている。私の職場である老健でも入所当初は環境に慣れることなどで精一杯な様子で加算の算定ができる期間に OT がうまくできないクライアントがいる。あるクライアントは入所してかなり経過した後で「手芸がしたい」と希望された。そしてその手芸が楽しみで大切な作業となり、心身機能が向上した。経営のことを考えると加算算定期間に希望してくれたらいいのに、と邪な考えが浮かんだが、同時にこのクライアントにとって当然の過程とも思えた。やっとな作業をする気になれたのである。場合によっては加算対象期間外という理由でクライアントが作業を始めることを拒むことが考えられる(筆者はそうならないように努めている)。このようにどのようなきっかけで作業が始まるかというエビデンスがあれば OTR の仕事が報酬として保障される可能性があるだけでなく、クライアントが作業を始めるためにどのような働きかけが有効か、あるいはどのようなタイミングが有効なサインかを OTR がつかみやすくなるかも知れない。もう一つ、クライアントが一つの作業ができるようになった後に、他の作業へと展開していくことを経験したことがないだろうか。このエビデンスが証明されたら OT は有効な介入方法と更に認められるかも知れない。作業が始まる時、作業が広がることについて私の知人が研究し、投稿中とのことである。掲載されたら是非読んでいただきたい(注：この講演当時は投稿中であつたが、後日掲載された。福田久徳、他：病後の作業再開を可能にした背景。作業療法, 30(4), 445-454, 2011.をご参照いただき



たい)。

クライアントは作業を始めるタイミングについて、常に自分でしたい、できるようになりたい作業を初期評価時点で表明しているだろうか。長期間、自らの意志を持って作業をする経験が少ない人は新たな場所ですんなりと作業を始めることができるのだろうか。そして OTR は認知的な問題や重度の障害を有するために自己の意志の表出が困難なクライアントに応じることはできないのだろうか。経験のある OTR ならば決してそうではないということを知っているはずだ。それではどうしたらよいのだろうか。私は、前述の研究<sup>10)</sup>でインフォーマントがどのように作業を選んだかについても聞いた。対象となったインフォーマントからは4つの選び方が挙げられた。学生や職業人などその場で求められる作業を行う「義務」の他に、「自主的に作業を選ぶ」、「他者の勧めによって作業を選ぶ」、周りの人がしているから自分もするというような「環境に合わせて作業を選ぶ」の4つが挙げられた。全てのインフォーマントが全ての作業の選び方を生涯を通じて用いていることがわかった。自主的に何もかも選んでいるように見えたインフォーマントでも人生の中では他者の勧めや環境に応じて選ぶことがあった。インフォーマントは人生の初期段階では選択の自由が少なかったが、人生後期では自主的に選ぶことが多くなっていた。1人のインフォーマントは、「他者がするから自分もする」というやり方を多く取っていた。これらのことから高齢者には馴染んだ作業の選び方があるという可能性が伺えた。私は自己の研究から初回面接・評価で作業に関する希望がなくてもあらゆる方法を試みるようになった。たとえば、他のクライアントの例を紹介する、作業をしている場面を見学してもらう、作業を実際に体験してもらう、仲の良いクライアントに声をかけてもらう、などである。自主的に口頭で作業を選ばなくても、結果的にクライアントが作業につながれば良いと考えている。火のないところに煙が立たないように作業をしたくなるような環境や人脈(火だね)を使うことによって人は作業に繋がる(煙)ように支援するようになった。

OTR であれば人と作業の関係について疑問に思うことがいくつか挙がるのではないだろうか。研究職である、あるいは大学院生であれば研究は容易かも知れないが、状況によっては研究することが困難なこともあるだろう。できるだけ信頼性、妥当性の高い研究ができることにこしたことはないが、勇気を持ってできることから発表することを期待したい。自分が持った

研究疑問を明らかにすることで誰かが救われるかも知れない。近年、大学院で学ぶ環境が整備されている。研究したいと思ったら大学院の門をたたか、研究に詳しい人と繋がることを勧めたい。

### 作業のレンズ

作業科学を学んで良かったと思うことが OT 実践以外にある。それは様々な作業の知識が体にしみこんできて身近なことや社会で起こっていることがひと味違って見えるようになったことである。このことを端的に表している写真が、吉川<sup>30)</sup>の「ウィックス氏が持参したメガネ(作業のレンズ)」である。Wicks は吉川の講義要旨の中で「作業科学に出会ってから、(中略)大きな変化がありました。まず、作業のレンズで世界を見るようになりました。それは常に作業科学者であるということです」と述べた後に自身の経験が記してある。私は大いに共感した。作業科学に出会い、作業の知識を持った人は誰でもこのことを体感したことがあるのではないだろうか。

2010年に機会があり、内閣府が主催している共生社会を作るための「青少年コアリーダー育成プログラム」<sup>31)</sup>の派遣青年としてドイツに約10日間行くことができた。OT やリハビリテーションに限局した研修ではないので私が OTR としてのスキルアップのために行くとしたら得るものは少なかったかも知れない。私はドイツを作業のレンズでしっかり見てこようと決意した。ドイツの人はどんな作業をしているのだろうか。それはどんなものでどのような意味があり、どのように役立っているのか、という視点で見たり、聞いたりしようと思った。このプログラムは「高齢者」、「障害者」、「青少年」の3領域があり、私は「高齢者」を選択した。その派遣先がドイツだった。ドイツでは行政機関や高齢者の入所施設、ボランティア団体、研究所、地域の拠点、多世代住宅など多様な場所を訪れ、意見交換を行った。1泊2日でホームステイがあり、ドイツの日常生活を経験することができた。特に印象に残ったことを紹介する。ドイツの高齢者はとても元気な印象を受けた。夜遅くまで飲み、週末はハイキングに出かけていた。緯度が北海道と同じか北なので冬は寒く長く、室内でコツコツできる刺繍が人気の作業のようだった。陶磁器の国なので居室や自宅には豪華な食器棚と食器が飾られていた。飾るだけではなく、来客が来た場合は惜しげもなく使い、先祖代々少しずつ同じシリーズを集めているとのことだった。食器やグラス類はよく磨かれていた。室内はどこも清潔で掃除が

よくなされており、物が少なかった。観察だけでも様々な作業が浮かび出てくるようだった。見学した中で印象的だったのが高齢者のボランティア団体の活動だった。ドイツはキリスト教文化が色濃く、ボランティアの歴史や実践が充実している。「現代史センター」という団体のボランティアの案内で首都ベルリン市内を視察した。第二次世界大戦のことや東西ドイツが統一されるまでの苦難な状況の説明があった。「私たちは思い出をお墓に持って行くのではなく、今の人に伝えたい。そのためにこのような活動を行っている」という作業の意味が心に残った。この団体は高齢者にしかできないこととして昔のファッションの話や学校に出向いて火のおこし方なども伝授しているとのことであった。年をとっているからこそできること、ということ大切に、質を維持するために研修を行いながら活動しているとのことであった。「ソーシャルワークベルリン」は創始者のトレセンロイター氏が約40年前に高齢者を支援した経験から始まった団体である。高齢者が高齢者を助ける自助グループであり、高齢者施設を訪問し、クリスマスパーティーを開催して施設にいる高齢者を招待しているなど非常に幅広い活動を行っていた。美しい2階建ての建物は長年の活動と交渉で国と市の助成と寄付金で借入金なく建てたとのことである。1人ずつ質問できることができたので私は幹部の方々に「皆様はとても健康そうに見えます。皆様がしている活動と健康の関係は何かありますか」と尋ねた。対応して下さった幹部は80~90代の方だったので全員一度は大病を患ったそうである。しかし、またソーシャルワークベルリンに戻って働かなければ、と思い、病気を克服したとのことである。逆にメンバーが病気になった場合は必ずポストを開け、帰ってこられるようにしている。たとえ病気や障害があったとしてもできない部分は他の人が支援して仕事を続けられるようにしているとのことだった。彼ら/彼女らは口々に「ここの活動は私にとっての義務だ」と言っていた。代わりはいくらでもいる、というような世の中になったような気がする昨今、かけがえのない存在として作業をする機会を大切に確保しつつける姿に非常に感動した。三つ目のボランティア団体「ヘンネフ高齢者事務所」ではコミュニティバスの運行、パソコン教室担当、カフェ担当、ボランティア同士の交流促進担当など各担当が活動について語って下さった。通訳を介してではあったが、自己の担当活動に誇りを持って取り組んでいることが伝わってきた。ケアホームという高齢者入所施設を訪問したときに、ドイツは入所

施設に必ず入所者代表委員会というものを設置しなければならないという法があるそうである。オーバーさんという95歳の男性が説明して下さった。食事やレクリエーション、待遇など暮らしやすいようにするために入居者の意見を聞き、経営側と交渉しているとのことである。なかなか意見が出にくく、各部屋を回って意見を代筆する、映画上映会を企画する、その後に参加者からインタビューする、など努力していた。オーバーさんはこの活動がとても楽しく、生き甲斐だと語った。元教師のオーバーさんは車いすと補聴器を使用していたがとてもお元気そうであった。そしてドイツでは「多世代」がキーワードであったような印象を受けた。日本の公民館のような地域の拠点を政府のモデルプロジェクトで作っていた。訪問した「クリエイティブハウス」では多世代が交流するような取り組みが必須とのことであった。高齢者と子どもがお互いの遊びを体験し合ったプログラムでは最初はお互いに偏見を持っていたが、次第にお互いの遊びを楽しむようになったとのことである。高齢者が子ども達は電子ゲームばかりやって、と思っていたがゲームのおもしろさにはまり、子ども達は高齢者の遊びを古くさいと思っていたが熱中したとのことである。他、担当者がプログラムの中で講師や参加者が主体的で積極的なものは人気があり、参加者同士で遠足に行くなど、作業が拡大する傾向にあるという話も興味深かった。運営側がおもしろいだろうと深く考えず作ったプログラムは参加者が少なく、消滅しやすいとのことだった。ケルンにあった「多世代ハウス：LEDO」（\*日本ではコレクティブハウスと呼ばれ、首都圏にあるようである）は団地のような居住地であるが、建設前から住民を募り、仲良く暮らせるように作業を通してマッチングしているとのことであった。地元の大学と協同でアート作品を作る、カーニバルという祭りに皆で参加する、ということが例として紹介された。仲良くなり、相性を知るには会話だけでなく、恐らく作業が有効なのではないかと思った。多世代住宅には老若男女、障害のある人もない人も、単身者も世帯も、動物も住民としてお互いに支えながら楽しそうに生活していた。住宅のある街が良くなるようにバス停や小道の設置を行政に働きかけているそうである。ここで紹介したことは研修の中の一部に過ぎない。作業のレンズで臨んだことで何倍も楽しめたような気がする。毎年2月に日本が派遣国の3領域で活動する青少年を招へいし、NPO マネージメントフォーラムという社会活動を行っている、あるいは行おうと考えている日本人青年と「社会のニ



ーズを把握し、活動を企画する」、「活動の広報を行う」、「活動資金の調達の仕方」という3つのトピックでディスカッションをするというプログラムがある。このプログラムは参加費が無料で審査はあるが応募条件は3領域での活動経験があり、23~40歳であることである。大抵12月中旬が申込締め切りなので、作業に焦点を当てた社会活動を行っている、行いたい海外に行くことが難しいという人はぜひ参加していただきたい。海外から招へいされた青年達にはNPOマネジメントフォーラムの後にその年に指定された都道府県に行き、3領域の日本の現場を見て、ディスカッションする「地方プログラム」がある。

今回の経験で国や地方自治体が青少年の国際交流に力を入れていることを知った。他の国も同様のようだ。私の参加した海外研修や高木の「オーストラリアン作業科学センター研修報告」<sup>32)</sup>のように探せば機会が見つかるはずである。年齢制限があるが、ぜひ参加して欲しいと思う。そして日本が更に作業のレンズを通して違って見えるに違いない。

### 他の人と繋がる

最後に、作業の知識に関係する人と繋がることを勧めたい。私の作業科学を通じた友人達が哲学者や文献から作業を表すような言葉や文章を教えてくれる。私も見つける。作業科学を通じて知り合った人たちと念願の作業科学セミナー（第13回、福岡、2009年）を開催することができた（図1）。母校も職場も違う仲間であり、共通点は作業科学に関心があるということだけである。第14回作業科学セミナーの実行委員の母体であるさとう会も同様であると思う。発足約1年で作業科学セミナーを開催することができた。素晴らしいことであると思う。このようなつながりは何かを産み出すことができると信じている。知識や実践、活動を造り出すだけでなく、社会を変えることができるかも知れない。作業科学に関心のある方々が何らかの形でつながって欲しいと思う。作業科学セミナーはその一つの形である。

つながることには様々なことがあるが、次に作業科学に貢献しそうな他学問領域の人とのつながりを提唱したい。OTR以外の人は作業科学者か、という疑問については既に日本作業科学研究会の会員にOTR外の方がいることや「作業科学」の様々な領域の研究者の貢献から伺い知ることができる。参加した研修会で出会ったOTR以外の講師に対し、作業科学セミナーで講演して欲しい、一緒に研究したらおもしろそう、と勝



図1 第13回作業科学セミナー実行委員会（福岡、2009）

手に感じることもある。これらの方々は「作業」という言葉を用いていないが、共に手をとれば作業科学はより広く、深みを増していくと思う。

私の職場が年1回開催している教育講演会のことである。介護支援相談員の友人が研修会で出会ったという鹿児島大学工学部建築学科の鈴木健二准教授が講師だった。「高齢者の暮らしやすい環境」というテーマだったので換気や採光などの専門的な話だと思っていた。鈴木准教授の話は具体的な技術的な話ではなく、高齢者向けの病院や施設の構造を研究した結果、人の生きる力を奪う環境が多く、それは建築家の責任だと話した。何とか生きる力を取り戻せるように、と願う現場の職員と話し合い、建築の専門として残さねばならない柱や壁、反対に改造できる柱や壁を工夫し、既存の施設を生きる力を引き出すような改装に取り組んでいるとのことであった。私は鈴木准教授の言った「生きる力を引き出す環境」は「作業したくなる、できる環境」と置き換えることができるのではないかと思った。グループホームでのタイムスタディー（時系列で職員の作業内容と動く範囲を調査）では、優れたグループホームの職員は入居者のプライバシーを保護しつつ、リスクを予測した動きをしているとのことだった。反対のグループホームは入居者を1カ所に集めた処遇や職員が全くなくなる空白の時間ができるとのことだった。研究の視点が独特であるという印象を受けた。鈴木准教授は、授業の中で学生に新居に引っ越す時に持って行きたいモノを調査していた。その結果は各学生が大切にしているモノのテーマが象徴されているとのことだった。第14回作業科学セミナーで基調講演をしたHockingは日用品が人々にとってどんな意味を持つか、

そして物を所有し、使用することで人々のアイデンティティがどのように作られ、周囲に伝えられているかというテーマについて研究しているという報告があった<sup>33-35</sup>。物と作業の関係の多角的な捉え方が明確になると何らかの知見になるかも知れない。他分野の研究者が行っているから作業科学が二番煎じになるのではなく、同じ現象についてそれぞれの学際分野が研究することでそれぞれの専門分野から世の中に貢献することができ、作業科学者は他の学際分野と交流していったら理想的だと私は考えている。鈴木准教授との出会いで「建築学」に関心を持つことができた。不勉強な私は建築学と作業科学はあまり関係がないのではないかと思っていた。この機会に鹿児島大学工学部建築学科のホームページ<sup>36</sup>を見てみた。地域計画・建築計画の友清研究室は、「建物を造るには設計が必要ですが、その建物はどのような機能を持つべきか、どの程度の規模が好ましいか、どのような地域に配置するのが適切か等、基礎データが無いことには設計できません」とある。都市計画・歴史意匠の木方研究室には「建築や都市は一握りの専門家や一時代の技術によって造られるものではなく、多くの人々の知恵と努力の積み重ねによって成り立っています。(中略)建築や都市に何が求められているかを考え、計画、デザインへと結びつけていきます」とあった。そして鈴木研究室は「建物とは、ただ単に建物を造れば良いものではありません。特に多くの人々が利用する公共の施設では、建物を利用する人たちにとって使いやすく、快適な空間であることが求められます」という研究室の紹介文があった。科研費(文部科学省研究費)の研究紹介では、「医療制度改革に伴う療養病床からユニット型介護施設への転換に関する研究」、「少子高齢と人口減少に対応した生活サービス拠点の再構築」、「離島・過疎地域での居住継続を可能とする小規模高齢者施設と地域ケアに関する研究」というテーマが挙げられていた。私にとって一見、建築家が挙げた研究テーマとは思えなかった。建築家はデザインや耐震性など技術的なことのみに関する専門家と勝手に思っていたからである。建築の専門家と作業の専門家が繋がると素晴らしい研究ができるのではないかと想像している。このように思えたことも作業科学に出会ったからだと思う。作業のレンズで講演を聴いていなければただの興味深い話で終わっていただろう。他にも作業科学に寄与しそうな他領域の専門家がいるかも知れない。そのような方に出会ったらぜひ紹介して欲しい。できれば作業科学セミナーに招へいできたら良いと思う。



図2 崩壊して21年後のベルリンの壁(ドイツ, 2010)

### 壁が壊れるとき

話はドイツに戻るが、研修中に「ベルリンの壁」を見ることができた(図2)。ベルリンの壁が崩壊したのはいつかご存じだろうか。1989年11月19日だそうである。そのとき私は作業療法学生だった。その2年前は高校生であり、ドイツは東西に分かれており、分かれていることは様々な過程を得た後の政治的信条の違いによってだ、ということを経験で学んだ。壊れるはずがない壁が壊れた、と驚愕の思いでテレビニュースを見たことを鮮明に覚えている。作業科学がいつこの世に生まれたのをご存じだろうか。同じ1989年、米国南カルフォルニア大学に誕生した。作業科学は順調な成長を遂げたのではなく、様々な困難と対座したことがあった<sup>1,26</sup>。時代が巡り巡って今がある。ドイツは東西ドイツが統一し、発展している。作業科学は多くの国、OTR、作業科学に関心のある人の間で発展している。私も作業科学と出会ったことによって発展していると思いたい。ベルリンの壁を見て考えた。私たちにはいろんな壁があるのではないかと。作業科学を学びたいけどよくわからない、作業科学の知識を生かしたOT実践をしたいけど現場や医療・介護保険のしくみが、クライアントのしたい作業ができようになりたいけど現実の制約が、作業に関する研究がしたいけど時間がない、知識がない、周囲に詳しい人がいない、大学院に行くことに踏み切れない、など多くの壁が目の前を立ちはだかる。ベルリンの壁は「壊れるときが必ず来る」と私に教えてくれたような気がする。壊れるはずのない壁は機が熟すれば壊れるときが来る。壊れた後には必ず素晴らしい未来があると私は信じている。私のホストファミリーのBarbara Sawadeは旧東ドイツ

の出身で、統一前後は苦勞があったが、ベルリンの壁が崩壊後 20 年の今は自由でとても良い、と語っていた。

### おわりに

どのような作業の知識が役に立っただろうか。あるいは役に立ちそうか。どのような作業の知識があれば人や社会の役に立つと思うか。本講演では 1 人の OTR としての経験について話させていただいた。先に挙げた問いに各人に答えて欲しい。その先に助かる人、社会があると思うから。

### 文献

- 1) Zemke R, et al (著), 佐藤剛 (監訳) : 作業科学—作業的存在としての人間の研究. 三輪書店. 2000.
- 2) 加藤貴行 (訳), 高橋龍太郎 (監修・解説) : 自立して生活する高齢者への作業療法. JAMA<日本語版>, 6 月号, 74-81, 1998. (原文 : Clark F, et al:Occupational therapy for independent-living older adults. JAMA, 278(16):1321-1326, 1997)
- 3) Jackson J, et al: Occupation in lifestyle redesign: the well elderly study occupational therapy program. Amer J Occup Ther, 52(5):326-336, 1998.
- 4) カナダ作業療法士協会 (著), 吉川ひろみ (監訳) : 作業療法の視点—作業ができるということ. 大学教育出版. 2000.
- 5) Kielhofner G (編著), 山田孝 (監訳) : 人間作業モデル [理論と応用] 改訂第 3 版. 協同医書出版社. 2007.
- 6) Fisher A et al: Assessment of motor and process skills. 7<sup>th</sup> edition. Three Star Press Inc. 2010.
- 7) 岡千晴, 他: 自分らしい人生を作業で描くプロセス. 作業科学研究,3(1):29-35, 2009.
- 8) Pierce D: Occupation by design—building therapeutic power. F.A. Davis. 2003.
- 9) 日本 AMPS 研究会 : クライアント中心の作業を基盤とした作業療法実践. AMPS (Assessment of motor and process skills)事例集第 3 版. 2008.
- 10) 村井真由美: 通所リハビリテーションを利用している脳血管障害を有する高齢者の作業選択パターンに関する研究. 札幌医科大学大学院保健医療学研究科博士後期課程理学療法学・作業療法学専攻作業科学分野. 2001.
- 11) Christiansen C: Identity, personal projects and happiness: self-construction in everyday actions. JOS, 7(3):98-105, 2000.
- 12) Braveman B et al: Occupational identity: exploring the narrative of three men living with AIDS. JOS, 8(2):25-31, 2001.
- 13) Laliberte-Rudman D: Linking occupation and identity: lessons learned through qualitative exploration. JOS, 9(1): 12-19, 2002.
- 14) Segal R: Occupation and identity in the life of a primary caregiving father. JOS, 12(2):82-90, 2005.
- 15) Vrkljan BH, et al: Linking occupational participation and occupational identity: an exploratory study of the transition from driving to driving cessation in older adulthood. JOS, 14(1):30-39, 2007.
- 16) Wiseman LM, et al: Life history as a tool for understanding occupation, identity, and context. JOS, 14(2):108-114, 2007.
- 17) Phelan S, et al: Occupational identity: engaging socio-cultural perspective. JOS, 16(2): 85-91, 2009.
- 18) Huot S, et al: The performance and places of identity: conceptualizing intersections of occupation, identity, and place in the process of migration. JOS, 17(2):68-72, 2010.
- 19) Townsend E, et al. (編著), 吉川ひろみ他 (監訳) : 続・作業療法の視点—作業を通しての健康と公正. 大学教育出版. 2011.
- 20) Wiseman L, et al: Understanding occupational transitions: a study of older rural men's retirement experience. JOS, 16(2):104-109, 2009.
- 21) Jonsson H, et al: Retirement: an occupational transition with consequences for temporality, balance and meaning of occupations. JOS, 7(1):29-37, 2000.
- 22) Rozario LD: From ageing to sageing: eldering and the art of being as occupation. JOS, 5(3): 119-126, 1998.
- 23) Price P, et al: Learning to promote occupational development through co-occupation. JOS, 16(3):180-186, 2009.
- 24) Wiseman JO, et al: Occupational development: towards an understanding of children's doing. JOS, 12(1): 26-35, 2005.
- 25) Whiteford G: Artistry of the every day: connection, continuity and context. JOS, 14(2): 77-81, 2007.
- 26) 吉川ひろみ: 「作業」って何だろう—作業科学入門. 医歯薬出版株式会社, 2008.
- 27) 吉川ひろみ (訳) : COPM[カナダ作業遂行測定]第 4 版. 大学教育出版, 2007.
- 28) 梅崎敦子, 他 : 作業に焦点を当てた実践への動機お



- よび条件と障壁. 作業療法, 27(4):380-393, 2008.
- 29)フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』: 自己実現理論. <<http://ja.wikipedia.org/wiki/>>
- 30)吉川ひろみ: アリソン・ウィックス (Alison Wicks) 講義録～私にぴったり: 作業科学がいかに見方を変えたか～. 作業科学研究, 3(1):36-38, 2009.
- 31)内閣府政策統括官 (共生社会政策担当): 内閣府青年国際交流事業報告書 2010. 平成 22 年度青年社会活動コアリーダー育成プログラム (第 9 回), 2011.
- 32)高木雅之: オーストララジアン作業科学センター研修報告. 作業科学研究, 4(1):45-47, 2010.
- 33)Hocking C: A model of interaction between objects, occupation, society, and culture. JOS: Australia, 1(3):28-45, 1994.
- 34)Hocking C: Person-object interaction model: understanding the use of everyday object. JOS: Australia, 4(1):27-35, 1997.
- 35)Hocking C: Having and using objects in the western world. JOS, 7(3):148-157, 2000.
- 36)鹿児島大学工学部建築学科 教職員と研究室. <[http://aae.aae.kagoshima-u.ac.jp/aae/03\\_staff.htm](http://aae.aae.kagoshima-u.ac.jp/aae/03_staff.htm)>